

「今、私の晴雨計は！」^⑩

「ウズベキスタンの空を見上げて」³

平山征夫

短くまとめようと思っていた
「ウズベキスタン旅行記」も昨年
のイタリアと同様3まできてし
まった。

前回書いたことでウズベキスタ
ンが何故親日的なのか、なぜ「日
本人の勤勉さを見習いなさい」と
母親は言うのか、など書き残して
しまったが、良い話なので矢張り
触れたいと思ったからだ。

タシケントに連れてこられた
抑留者のうち工兵が選ばれて四
五七名、ナヴォイ劇場の建設に当
たった。二年間日本兵はレンガ積

み、床張りなどと与えられた各種作
業に従事した。この劇場はソ連を
代表する設計者アレクセイ・シュ
チュージェフによるもので、今見て
も本当に美しい。厳しい食糧事情
の中で黙々と働く日本兵を見て、
市民は次第に尊敬の眼で眺める
ようになり、こっそり食料を収容
所の入り口に置いてくれる子供
たちもいた。それに対し日本兵は
余り木で精巧な玩具を作ってそ
っと入口に置いといたという。
こうして出来上がった劇場が
真の評価を得たのはそれから二
〇年後の一九六六年四月に起こ
ったタシケント大地震の際だっ
た。市内の大半の建物が崩壊した
中でこの建物はびくともせず、
人々の避難場所となった（この地

震も今回の熊本の地震と同様余
震が一月以上続き、人々は安全
な建物以外、外で寝泊まりしたそ
う）。市民はこの劇場を建てた日
本人捕虜たちが、捕虜と言う条件
下でこれほど確かな仕事をした
ことに驚嘆と尊敬の念を強く抱
いた。だからソ連から出された日
本人墓地の移転・更地化の命令を
受け入れず墓を守ったのだ。
ガイドさんの案内で建物の壁
を見たら、そこには一九九六年カ
リモフ大統領が設置したプレー
トがあり、「一九四五〜四六年に
かけて極東から強制移送された
数百名の日本国民が、このアリシ
エル・ナヴォイ劇場の建設に参加
し、その完成に貢献した」と日本
語を含む四か国語で書かれてい

た。
その時、同じツアーの参加者の
Kさんが話し始めた。「私の祖父
はこの劇場建設に従事させられ
ました。食べ物がなく労働条件は
厳しかったのですが、着ている
物は捕虜の日本兵の方が良かつ
たですし、煉瓦積み作業にして
も縦、横、高さいくら煉瓦が必要
か日本人はすぐ掛け算で計算し
て効率的に作業したのですが、ロ
シア人は掛け算が出来なかった。
だから作業が進むにしたがって
どっちが捕虜か分からなくなっ
ていったそうです・・・」と。K
さんの祖父はその後バグーだろ
うか移動して石油の作業に従事
させられたが、数年後無事祖国の
土を踏むことが出来たそう。Kさ

んは祖父から抑留生活の話をかされ、いつかこの劇場を見たいと思っていたそうだ。そして今回ツアーに参加したのだった。ウズベキスタンの親日、母親の子供たちへの教えなどはこの抑留日本人兵の話に由来しているのだ。

このKさん、歳の頃なら六〇歳前後、少し年齢差がある奥さんと夫婦でのツアー参加だが、二人は手を繋いでいるか、奥さんにポーズを執らせて旦那が写真を撮っているか、まるで新婚アツアツという雰囲気だ。「あの夫婦再婚の新婚ですかね？」と同僚のIさんが聴いてくる。私も同じことを考えていた。新潟の老人ホームの三人組と言っている手前、他人のこととをあまり詮索するのはどうか

と思ったのだが、興味に勝てずつい質問してしまった。「あまり若くない夫婦がいつも手を握り合っているというのは珍しいですね。私にとっては天皇・皇后両陛下以来拝見しましたのですが……」と聴き始めたところへ、間髪入れず隣からIさん、「再婚されたばかりですか？」と突っ込む。「いいえ、家には二八歳になる息子もいます」と奥さん。「そうですね。珍しかったもので……どうも失礼しました」と私。そこへ旦那の止めの言葉。「へー、珍しいんですか。私は皆さんもやっておられるもんだとばかり思っていました。私たち家でもよく握り合っていますよ……」。

それからしばし、奥さんだけで

参加した女性二人を交えて議論となった。「ツアーから帰ったら私も手を握るようにしようかな」と言う心にもない私の発言に、ふたりとも「今更気持ち悪い。急に握ってきたら私なら振りほどくわね……」。ウズベキスタンの青い空を見上げ、「やっぱりやりつけないことは止めておこう」と心に誓った。

(平成二十八年七月十五日)